

大学と地域の連携を重視した 野外教育の実践と学習満足度調査

— 上信越高原国立公園・志賀高原を対象として —

Outdoor Education Focusing on University–Community Collaboration and Learning Satisfaction
Survey: The Case of Shiga Kogen in Joshinetsu Kogen National Park

深田喜八郎¹, 水上健一², 浅井泰詞³, 長津恒輝⁴, 中村 剛⁵
Kihachiro Fukada¹, Kenichi Suijo², Taishi Asai³, Koki Nagatsu⁴, and Tsuyoshi Nakamura⁵

¹ 日本大学文理学部 / College of Humanities and Sciences, Nihon University

² 中部大学生命健康科学部 / College of Life and Health Sciences, Chubu University

³ 高千穂大学人間科学部 / Faculty of Human Sciences, Takachiho University

⁴ 静岡大学 / Shizuoka University

⁵ 武蔵野大学教育学部 / Faculty of Education, Musashino University

Abstract

This study examined outdoor education that could benefit both the university and the community by citing an example of outdoor education that focused on university–community collaboration and learning satisfaction evaluations. University A offers water-activity training as part of its outdoor education program. It holds classes at Shiga Kogen in Joshinetsu Kogen National Park by inviting local residents as instructors. The outdoor education program at University A was examined as an example of university–community collaboration, as university instructors collaborated with local residents in conducting classes. The classes included “Standup paddleboarding,” “Canyoning,” “Outdoor rice cooking,” “Rope work/ water emergency rescue,” and “Mountain life/the role of water in the environment.” These classes were developed jointly with area residents. For this reason, the satisfaction ratings of these classes were high, and certain learning outcomes were observed. Outdoor education that focuses on collaboration between the university and the community also benefits the community in that the latter becomes a place of education. Shiga Kogen is an attractive tourist destination. The use of this park as a place of education may be an effective means of exposing many young people to its natural environment. Such outdoor education programs, when repeated, could lead to the implementation of an educational method that fully exploits regional characteristics and contributes to the development of the community.

キーワード：自然体験活動，水辺活動，地域の利用促進，人材育成

Key Word: nature experience, waterfront activities, use of regional resources, human resource development

1. 緒言

1996年に報告された「青少年と野外教育の充実について」において、野外教育は「自然の中で組織的、計画的に、一定の教育目標を持って行われる自然体験活動の総称」と定義された（青少年の野外教育の振興に関する調査研究協力者会議，1996）。同年に報告された中央教育審議会第一次答申において、これからの教育では「生きる力」の育成が重要であるとし、「生きる力」の育成のため自然体験の機会を増やすよう求めている（中央教育

審議会，1996）。これを契機に、日本国内において野外教育という言葉が広がり、青少年の育成のための重要な教育活動として捉えられてきた。日本野外教育学会（2022）は、野外教育の充実をはかるための政策提言の中で、「野外教育の教育効果は、「自己成長」と「社会的人間関係」、そして「環境に対する行動と理解」に整理される」と述べている。つまり、体験を通じた人間としての成長と、自然環境の理解をふまえた行動の実践を教育効果として挙げている。

野外教育は小学校や中学校といった義務教育期間中の実施だけではなく、高等教育においても広く実施されている。高等教育における野外教育は、体育・スポーツを専攻とする学部・学科で開講されているだけではなく、一

大学地域連携学研究 3：32–40, 2024

連絡先：深田喜八郎

東京都世田谷区桜上水 3-25-40 日本大学文理学部

fukada.kihachiro@nihon-u.ac.jp

受理：2024年1月13日

一般教養科目として設置している大学も多い。専門とする学問領域に関わらず、必修科目や選択科目、教員免許状取得に必要な科目として多様な学問領域の学生が履修している。大学生を対象に野外教育の教育効果を検討した報告では、キャンプ実習やスキー実習、マリンスポーツ実習を通してコミュニケーションスキルや社会的スキルが向上することを明らかにしており(橋本ほか, 2013; 中澤ほか, 2014; 浅井ほか, 2020), 野外教育は大学生の教育にも重要であることがわかる。野外教育は、「自然体験活動の総称」と定義されており、スキーやキャンプ、水辺活動などの体験活動を行うために自然環境の確保が必須となる。特に、周囲に自然環境が乏しい首都圏に位置する大学においては、野外教育を行うための自然環境を確保し、その安全性にも留意した上で教育活動を展開する必要がある。故に、野外教育の実施には自然環境が充実した地域との連携、さらにはその地域を熟知した人材との連携が重要となる。

2005年、中央教育審議会の答申「我が国の高等教育の将来像」が提示され、「大学は教育と研究を本来的な使命としているが、同時に、大学に期待される役割も変化しつつあり、現在においては、大学の社会貢献(地域社会・経済社会・国際社会等、広い意味での社会全体の発展への寄与)の重要性が強調されるようになってきている。当然のことながら、教育や研究それ自体が長期的観点からの社会貢献であるが、近年では、国際協力、公開講座や産学官連携等を通じた、より直接的な貢献も求められるようになっており、こうした社会貢献の役割を、言わば大学の「第三の使命」としてとらえていくべき時代となっている」と大学の使命を示した(中央教育審議会, 2005年)。大学の使命に社会貢献が加わり、これを契機に、多くの大学において地域連携活動のあり方を模索する動きが広まった。須田(2013)は教員養成と地域連携に関する報告において、大学と地域の連携のあり方について次のように述べている。大学が行う地域連携は3つのタイプに分類でき、1) 大学が主体的に行う地域連携、2) 学校や地域住民からの大学に対する要請に対して大学が応えるような連携、3) 大学が学生を教育するための場の提供を地域に要請するタイプの連携が存在すると述べている(須田, 2013)。大学における野外教育の実施を地域連携活動と捉えようとする場合、これら3つのタイプのうち、「3) 大学が学生を教育するための場の提供を地域に要請するタイプの連携」と捉えることができる。池田(2015)は、地域環境を活かした野外教育の推進について報告する中で、野外教育の実施方法について、「これまで多くの大学で実施されてきた野外教育関連の現地実

習は、実習先との関係において、実習フィールドや関連施設の提供等に留まり、実施スタッフについても実施校の教員や他大学の非常勤講師等を中心に行っているのが通例である。」と述べている(池田, 2015)。したがって、全ての大学に当てはまるわけではないが、多くの大学が実施している野外教育は、自然環境を一時的に借りることで実現していると考えられる。しかし、このようなタイプの地域連携には、大学や学生にとってメリットとなる一方、受け入れる地域にとってはデメリットとなる可能性が指摘されている(土屋, 2022)。土屋(2022)は、地域に教育の場を求めるタイプの連携は、学生の学びの機会を確保でき、教育効果を期待することができる一方で、受け入れる側の地域や学校の負担感が増す場合があると述べている。今後、大学の社会貢献がますます求められていく中で、地域との連携を重視し、両者がメリットを享受できるような野外教育のあり方を検討する必要がある。

池田(2015)は、地域との連携を重視した野外教育の実践例として、教育環境等の場の提供に留まらず、可能な限り地域で活動している専門家を外部スタッフとして迎える方法を紹介している。このような方法で実施することが、地域人材の発掘・育成、地域力の活用促進・強化にもつながる可能性を指摘している(池田, 2015)。したがって、野外教育を地域連携活動として捉え、大学と地域の両者に有益な教育活動となるよう検討することは重要と考えられる。

そこで本研究は、大学と地域の連携を重視した野外教育の実践例を報告するとともに、学習満足度評価を収集することで、大学と地域の両者に有益となる野外教育のあり方について考察することを目的とした。

2. 対象と方法

2. 1. 対象

東京都に位置するA大学で実施している野外教育の授業を調査対象とした。A大学では、フィールド・スポーツという名称で野外教育を行っており、野外実習、スキー実習、ウォーターアクティビティ実習が開講されている。フィールド・スポーツは2年次以降に開講されている一般教養科目のひとつであり、自由選択科目として、あるいは教員免許状取得に必要な単位のひとつとして履修する。本研究は、2023年度に開講されたフィールド・スポーツのうち、ウォーターアクティビティ実習を調査対象とした。

実習は、上信越高原国立公園内の志賀高原にて、2023年8月14日～8月18日の4泊5日の行程で実施され

た。志賀高原は長野県下高井郡山ノ内町に位置する高原リゾートとして知られており、夏季は冷涼な環境で高原散策やウォーターアクティビティを楽しむことができ、冬季は複数のエリアにまたがる大規模なスキー場にてスノーボードを楽しむことができる環境である。志賀高原に存在する川や池、湖をフィールドの中心として、水源散策やウォータースポーツ、ロープワーク、水難救助などの活動を行うことで、人間に関わりの深い「水」への理解を深めることを目的に実施した。「水」は生命活動に必要不可欠なものであるとともに、自然環境における「水」を活用することで、様々なアクティビティを楽しむことができる。しかし、自然環境における「水」は時として脅威になり、毎年多くの人々が水難事故によって亡くなっている。水難事故を未然に防ぐためには、自然環境における「水」にはどのような特性があるのか、どのような危険が潜んでいるのかを理解する必要がある。本実習は、自然環境における「水」を活用した活動を通して、「水」の特性や危険性について理解を深めることを目的とした。実習の行程を表1に示した。

2. 2. 実施体制

参加者はA大学に所属する学生25名で、男性が14名、女性が11名であった。大学教員5名、地域住民3名、助手1名、看護師1名の計10名で学生の指導にあたった。本実習の特徴的な点は、実施場所の地域住民を講師として迎えている点である。地域住民3名をA氏、B氏、C氏とし、3名のプロフィールを以下に記す。A氏は志賀高原に生まれ、幼少のころから周辺の自然環境と親しみ、現在は志賀高原内でホテルの経営に携わっている。A氏は地域の天候や地理に詳しく、安全管理に長けており、プログラム全般のアドバイスを依頼した。B氏は志賀高原内にある琵琶池や角間川にて、スタンドアップパドルボード(以下「SUP」と略す)やキャニオニングのツアーを提供しており、ウォータースポーツの指導を依頼した。

C氏は志賀高原ガイド組合に所属するガイドであり、志賀高原の植生や水源について熟知している。また、SUPやキャニオニング、釣り等のスキルにも長けており、B氏とともに活動全般の指導を依頼した。

大学教員5名のうち1名はA大学の専任教員、4名は兼任講師として帯同した。実習プログラムは専任教員を中心に、兼任講師、地域住民の全員が参加するミーティングによって決定された。ここでは、教育内容の充実とプログラムの実現可能性の両側面から検討が行われ、教員と地域住民の双方の意見を統合する形でプログラムが考案された。午前、午後に実施される活動は主にB氏とC氏の指導を中心に行い、教員は学生の安全管理を徹底するとともに、学生の学びが深まるよう助言を行った。夕食後のプログラムでは、大学教員を中心に班別ミーティングや講義を行った。講義では、「水の4大特性」について学ぶとともに、「川における水流の発生」について解説した。班別ミーティングでは、各班に教員が加わり午前、午後の活動を振り返るとともに、班員同士の意見交換が円滑に行われるよう介入を行った。以上のような体制で実習を行うことにより、大学と地域の連携を重視した野外教育の実践を目指した。

2. 3. プログラムの概要

「周辺散策」は1日目の午後に行い、琵琶池などアクティビティで使用する環境を視察しながら、志賀高原の自然環境について学ぶことを目的に実施した。B氏とC氏を中心に周辺環境の説明を行い、志賀高原の山々は水を太平洋側と日本海側に分ける中央分水嶺になっていることなど、その地域の水源に関する詳細が伝えられた。

「SUP」は2日目と3日目の午前中に2回、B氏を中心に指導を行った。SUPは近年注目されるウォータースポーツであり、サーフボードに似た形状のボードの上に乗る、1本のパドルを使用し水上を移動するスポーツである。池・湖・川・海などで楽しむことができるスポー

表1 ウォーターアクティビティ実習の行程

	1日目 (8月14日)	2日目 (8月15日)	3日目 (8月16日)	4日目 (8月17日)	5日目 (8月18日)
AM	現地集合	SUP ^{*1} (琵琶池)	SUP ^{*1} (千曲川)	キャニオニング (角間川)	グループワーク (清水公園)
PM	周辺散策 (丸池・琵琶池)	ロープワーク 水難救助 着衣泳 (琵琶池)	釣り (北竜湖)	飯盒炊事 (ホテル周辺)	閉校式 現地解散
夕食後	開講式 班別MTG ^{*2}	講義	班別MTG ^{*2}		

^{*1}: スタンドアップパドルボード, ^{*2}: ミーティング

ツであるが、間違った方法で行うと水難事故に繋がるスポーツである。本実習では、SUPの基本的な操作方法を学ぶとともに、ライフジャケットの着用方法や重要性について指導した。また、池と川のそれぞれで実施することで、水流の有無による操作方法の違いについても指導した。池でのSUPは志賀高原内の琵琶池で行い、川でのSUPは志賀高原内で実施することが困難なため、飯山市内を流れる千曲川の流れが穏やかなポイントで実施した。

「ロープワーク・水難救助・着衣泳」は2日目の午後には、B氏とC氏を中心に指導を行った。ロープワークでは日常生活に関連した結び方の紹介をはじめ、もやい結びなど水難救助でも活用できる結び方を指導した。ホテル内での指導の後、琵琶池へと移動し、実際の救助場面を想定した救助法の実践を行った。加えて、着衣の状態ですぐ水に入るとどのような負荷がかかるのかを体感するため、着衣泳を行った。いずれも、水の事故を未然に防ぐために必要な知識を伝達するために活動を行った。なお、活動中はレスキューチューブを備えた教員がSUPにて巡回し、安全確保に努めた。

「講義」は2日目の夕食後に、大学教員とB氏を中心に行った。講義は、「水の4大特性」と「川における水流の発生」というテーマで行った。「水の4大特性」は、「浮力」、「抵抗」、「水温」、「水圧」であり、水中に入ることによって生じる身体への負荷について解説した。特に、水中では身体にかかる「抵抗」が増すことで素早い身動きが取れなくなるということ、また、低い「水温」では、体温が急速に奪われるため、短時間でも生命に危険が及ぶことを解説した。「川における水流の発生」では、川岸と中央部における水流の違いや、川にある岩の存在によってどのように水流の変化が生じるのかを解説した。どのようなポイントで水流が速くなり、危険が存在するのかを中心に解説した。いずれの講義も、水難事故を未然に防ぐために必要な知識を得るために行った。

「釣り」は3日目の午後には、C氏を中心に指導を行った。基本的な仕掛けの作り方や餌のつけ方について指導するとともに、水辺の生物について解説を行った。釣りはウォータースポーツのひとつであるとともに、活動の中で唯一、生物に触れることのできるプログラムであり、人間以外の生物の命に触れることを目的に行った。なお、釣りは志賀高原内での実施が困難であったため、飯山市内の北竜湖で実施した。

「キャニオニング」は4日目の午後には、B氏を中心に指導を行った。キャニオニングは、川の上流部にある渓谷にて行うウォータースポーツで、水深の浅い川に存在す

る岩や岩壁を乗り越えながら散策を楽しむものである。活動を行うポイントに滝や水深の深い場所があれば、岩壁からの飛び込みや、滝を滑り台のように滑り落ちるアクティビティに挑戦することができる。キャニオニングを行う際、身体を保護するウェットスーツ、臀部を保護するハーネス、頭部を保護するヘルメットを着用することで、安全性を確保する機会が多い。本実習では、安全確保に必要なウェットスーツやハーネス、ヘルメット等の道具の取り扱いについて指導するとともに、川を登る際の注意点について指導した。志賀高原内の角間川で行われ、川の流れに遡って上流へと移動し、水深の深い場所で飛び込みを行った。大小様々な岩がある中で、水の流れがどのように変化するかを学ぶとともに、急流に逆らい移動することで水の流れが持つ力に触れることを目的に活動を行った。

「飯盒炊事」は4日目の午後には、C氏を中心に指導を行った。調理をする上で重要となる火起こしの方法を学ぶため、薪の配置や火を保つ方法を伝えるとともに、薪も重要な資源であることを伝え、資源を無駄にしないように調理するよう指導した。加えて、調理にも水を利用することから、志賀高原の水を利用し調理を行うことで、水源の重要性を学ぶことを目的に行った。グループで調理を行うため、準備から片付けまで、役割分担を明確にし、時間までに食事を終えられるよう計画することを指導した。

「グループワーク」は5日目の午前中に、教員及び地域住民の全員で指導を行った。志賀高原の湧水を飲むことのできる清水公園にて、生活における水と環境における水について考える時間を設けた。湧水を口にすることで、これまで体感した志賀高原の水を体に取り入れ、水に対する意識を深めることを狙いとした。加えて、公園内でグループワークを行い、水の存在について各自の意見を共有することで、水への理解を深めることを目的に活動を行った。

2. 4. 学生による学習満足度評価の記入

5日目の活動後、本実習の満足度や感想等を収集した。学生の意見は、大学と地域住民のそれぞれに有益な情報源になる可能性があり、活動内容の学習満足度評価とその理由について記述するよう求めた。「SUP」、「キャニオニング」、「飯盒炊事」、「ロープワーク・水難救助」、「山の生活/環境における水の役割について」の項目を設け、活動に対する満足度が高い場合を5、低い場合を1とし、5段階で満足度を評価するとともに、評価の理由について記述するよう求めた。また、自由記述欄を設け、実習

全体についての感想や意見を求めた。本実習において、「釣り」は志賀高原内での実施が困難であったため、飯山市内の北竜湖で実施した。志賀高原内で実施したプログラムの内容を研究対象とするため、本研究において、「釣り」に対する学習満足度評価は収集しなかった。「SUP」は志賀高原内の琵琶池で行う内容との比較のため、飯山市内の千曲川でも実施した。「SUP」は志賀高原内で行うプログラムが含まれているため、学習満足度評価を収集した。

なお、対象者には事前に研究目的で資料を活用する可能性があること、学会発表や学会誌への掲載にあたって個人情報には完全に秘匿されることを説明した。さらに、研究への参加に同意しなくても不利益を被ることはないということ、一旦同意した場合でもいつでも同意を取り消すことができ、同意を取り消しても不利益を被ることはないということを説明し、研究への参加に同意を得た。

3. 結果

学生による学習満足度評価の結果を、平均 ± 標準偏差 (Mean ± S.D.) で示した。表2に「SUP」及び「キャニオニング」、「飯盒炊事」の評価及びその理由を示した。「SUP」は 4.92 ± 0.28 、「キャニオニング」は 4.92 ± 0.28 、「飯盒炊事」は 4.48 ± 0.65 であった。表3に「ロープワーク・水難救助」と「山の生活/環境における水の役割について」の評価及びその理由を示した。「ロープワーク・水難救助」は 4.76 ± 0.44 、「山の生活/環境における水の役割について」は 4.80 ± 0.41 であった。表4に実習

表2 ウォータースポーツと飯盒炊事に対する評価の理由

活動内容	評価の理由 (学生数)
(5段階評価の平均)	
SUP [*] (4.92 ± 0.28)	池と川の両方ででき、静水と流水の違いを実感し、学ぶことができた。(9名) 簡単に乗ることができた、楽しかった。(8名) 池でのSUPは自由度が高く、楽しかった。(2名) やってみたかったから。立ちながら漕げた。(3名) 川でのSUPをもう少し長くやりたかった。(1名)
キャニオニング (4.92 ± 0.28)	飛び込みができた、とても楽しかった。(10名) ジャンプへの挑戦ができた。実習の中で一番チャレンジができた。(7名) 川を登る、清流に触れる、自然の中で体を動かす経験ができた。(5名) このような機会できて良かった、道具の必要性を感じた。(2名) 体調不良により不参加。(1名)
飯盒炊事 (4.48 ± 0.65)	協力、連携することの重要性を感じ、おいしい食事を作ることができた。(11名) 一から食事を作る良い経験ができ、食事のありがたみを感じた。(6名) 火起こしの方法を学べた。煙が辛かったが、やりがいがあった。(4名) 準備や片付けの大変さ、重要性を感じた(3名) 普段使用している道具の利便性の認識と、感謝の機会を得られた。(1名)

*：スタンドアップパドルボード

全体に対する感想をまとめた。なお、類似した内容の回答をひとつにまとめ、回答した学生の数を併記した。

4. 考察

4.1. 大学と地域の連携を重視した野外教育の学習満足度評価

本研究は、大学と地域の連携を重視した野外教育の活動内容に対するフィードバックを得るため、学生の学習満足度評価を収集した。「SUP」、「キャニオニング」、「飯盒炊事」、「ロープワーク・水難救助」、「山の生活/環境における水の役割について」に対する評価を集計した結果、全ての活動において評価の平均が4以上となり、本実習で実施したプログラムは、学生の満足度が高い活動であったことがわかる。

「SUP」の満足度が高かった理由として、池と川の両方で実施したことで、静水と流水の違いを経験できたという主旨の意見が多かった。スポーツとして簡単に楽しむことができること、特に池でのSUPの自由度の高さが高評価の理由であった。一方で、川でのSUPをもう少し長くやりたかったという意見もあり、今後のプログラムに反映できる意見も含まれていた。川は常に流れが生じているため、自由度を高くすることで、学生が流されてしまう危険性も存在する。本実習では、川の流れに逆らうことなく、川の上流から下流に向かう形でSUPを操作する活動を中心に行った。そのため、学生が集団から離れることも少なく、リスクを最小限にすることができた。今後は、川で行うSUPの満足度を上げるため、区間を限

表3 ロープワーク・水難救助と環境における水の役割に対する評価の理由

活動内容	評価の理由(学生数)
(5段階評価の平均)	
ロープワーク・水難救助 (4.76 ± 0.44)	実際の場面を想定し、普段できない体験ができた。一番良い経験になり、学ぶ価値があった。(11名) 事故に遭遇した時、いざという時のために役立つ知識を得ることができた。(7名) 着衣泳の経験は意識をがらっと変えてくれた、水が嫌いになりそうだった。(2名) みんなで協力して助け合えた、メンバーの絆が深まった。(2名) 結び方は取得できたが、上手に投げることができなかった。(1名) 寒さ対策をもう少し促したほうが良かった。(1名)
環境における水の役割 (4.80 ± 0.41)	水が貴重であること、水の重要性を感じ、水への理解が深まった。(15名) 水の多様な側面について学ぶことができた。(3名) 自然との関りが良く、自然の愛を感じた。自然や水に触れあっていたいと思った。(4名) 山は気候や気温の変動が激しく備えが必要。(1名) 美味しい水で作るコーヒーがおいしかった。(1名) 実践と講義を取り入れることで、経験と知識を結びつけることができた。(1名)

表4 実習全体に対する感想*

挑戦すること、経験することの重要性を感じた。大変な場面もあったが、達成感があった。(8名)
水の楽しさだけでなく、怖さも学ぶことができた。ただ楽しむだけでなく、学習の場として素晴らしいものだと感じた(6名)
先生方が楽しそうにしており、熱意を感じた。授業だが良い思い出になった。また来たいと思った。(5名)
大自然に置かれることで、自然に触れることができ、楽しかった。(2名)
人生や命について真剣に考えるようになった。(1名)
着衣泳のような苦難と一緒に体験すると、一気に仲良くなると感じた。(1名)
コミュニケーションの大切さを改めて実感した。(1名)

*：1名が無回答のため、計24名分の回答を集計

定して自由にSUPを操作する時間を設けるなど、地域住民と協議をしてプログラムの構成を検討する必要がある。

「キャニオニング」の満足度が高かった理由として、飛び込みができたこと、または飛び込みという未知の経験に挑戦できたことを高評価の理由とした学生が多かった。キャニオニングは、ウェットスーツとヘルメット、ハーネスを着用し、角間川を上流へと移動する形で実施した。自身の身体のみで水流に逆らい移動する経験は学生にとって新しく、さらには、滝や岩に囲まれた自然環境で飛び込みを行うことは、満足度の高い活動であったと考えられる。学生から「挑戦」や「チャレンジ」という言葉が得られた活動はキャニオニングのみであったため、恐怖心を克服し、何かに挑戦する活動は野外教育のプログラムを検討するうえで重要な点であることがわかる。

「飯盒炊事」の満足度が高かった理由として、他者と協力することの重要性を感じた、自身で一から作ることで食事のありがたみを感じた、という意見が多かった。

本実習で実施した活動は、グループで協力して取り組む活動が中心であったが、グループで何かを作り形にするという活動は、飯盒炊事のみであったと考えられる。「他者との協力や連携」という言葉が得られた活動は飯盒炊事のみであったため、他者との関係性を最も感じられた活動であったと推測される。「煙が辛かった」などの意見があり、その他の活動と比較して評価の数値は低くなったが、他者との関係性を感じられる活動は、野外教育の中でも重要と考えられる。

「ロープワーク・水難救助」の満足度が高かった理由として、実際の場面を想定し日常生活では体験できないことを実践できたこと、いざという時のために役立つ知識を得ることができたこと、を理由とした学生が多かった。水難救助では、ウェットスーツを着用した状態で学生が池に入り、別の学生が岸からロープを投げて水中の学生を助けるという手順で行った。このように、実際に水の中にいる人を救助するという場面を想定することが、学生の学びに繋がったと考えられる。一方で、上手に投げることができなかった、寒さ対策についてもう少し

し促した方が良かったという意見も見られた。ロープを結ぶという点に関しては十分な時間を設けて指導することができたが、ロープを遠くに投げる動作への指導が不十分であった可能性がある。また、寒さ対策について事前学習で伝えていたものの、自然環境での活動経験が乏しい学生にとって池の水は想像以上に冷たいものであった可能性がある。この2点に関しては、プログラムの構成を地域住民とともに再検討する必要がある。

「山の生活/環境における水の役割について」の満足度が高かった理由として、水の重要性を感じ水への理解が深まったこと、水の多様な側面について学ぶことができたという意見が多かった。本項目は、5日目のグループワーク及び全体の活動を振り返り評価する項目となっており、普段の生活では感じる事が少ない水の存在を改めて感じる事ができ、自身の学びに繋がったことを評価していたと考えられる。また、実践と講義を取り入れることで経験と知識を結びつけることができたという意見もあり、体験が重視される野外教育のプログラムにおいて、講義を取り入れることが、学生の学びに繋がったと考えられる。講義の内容は「水の4大特性」や「川における水流の発生」についてであり、水の基本的な性質を知る内容は、ウォーターアクティビティ実習で取り扱う講義の内容として適切なものであったと考えられる。

以上より、本実習で実施した活動は一部で課題が残るものの、学習満足度が高く、一定の教育効果があったと考えられる。地域住民を講師として迎え、大学教員のみでは知りえない自然環境を提供してもらうことは、野外教育を実施するうえで有効である。野外教育の教育効果は、「自己成長」と「社会的人間関係」、そして「環境に対する行動と理解」とされており(日本野外教育学会, 2022)、学習満足度評価の結果より、これらの項目は達成できたと考えられる。学生から得られたフィードバックは、大学側と地域側の双方に有益な情報として共有することが、大学と地域の連携を継続するうえで重要であろう。

4. 2. 大学と地域の連携を重視した野外教育のメリット

本研究は、大学と地域の連携を重視した野外教育の実践例をもとに、大学と地域の両者に有益となる野外教育のあり方について考察することを目的としたものである。先にも述べたように、野外教育は地域連携の形式として「大学が学生を教育するための場の提供を地域に要請するタイプの連携」であり(須田, 2013)、学生の学びの機会を確保でき、教育効果を期待することができるという大学側のメリットがある一方、受け入れる側の地域

や学校の負担感が増す場合があると指摘されてきた(土屋, 2022)。したがって、野外教育を大学地域連携活動の一環として捉えその価値を高めていくためには、地域側のメリットについて考察する必要がある。池田(2015)は、大学と地域の連携により実施した野外教育の実践例を報告し、地域側のメリットとして、「地域人材の発掘・育成」及び「地域力の活用促進・強化」につながる可能性を指摘している。さらに、「大学の保有している先行事例・専門的知見を活かした地域での現行取組の補強や新規事業の起業にもつながる」と述べている(池田, 2015)。総務省の「域学連携」が示すメリットにもあるように、大学と地域の連携には「学生や地域住民の人材育成」というメリットを生み出すことが重要になる。したがって、本研究で調査対象とした野外教育が、いかにして地域のメリットとなりうるか、「地域人材の発掘・育成」、「地域力の活用促進・強化」、「現行取組の補強や新規事業の起業」という視点から考察することとする。

「地域人材の発掘・育成」のうち、特に「人材育成」は、地域住民が野外教育という教育の場に携わることで達成されると考えられる。今回、野外教育への協力を依頼した3名は、ホテルの経営に携わっているA氏、ウォータースポーツの提供を行うB氏、ガイド組合に所属するC氏の3名であった。いずれも、志賀高原の観光に携わる仕事に従事しており、地域を訪れた人に志賀高原の魅力を説明する能力に長けているものと考えられる。一方、学生の教育に携わることは少なく、その地域環境を教育に活用できる教材として認識し、他者に説明する機会は少ないと考えられる。したがって、地域住民が教育の場に講師として携わることで、観光地としての魅力だけではなく、地域環境を教材として捉え説明できるようにもなり、その地域の人材育成につながるものと考えられる。このように、地域が持つ観光地としての魅力を、教育現場としても活用できるスキルが身につけば、その地域の発展に寄与する可能性がある。

次に、「地域力の活用促進・強化」は、授業で訪れた学生に地域の魅力を伝え、体感させることで達成されると考えられる。上述した「人材育成」に関連した点であるが、これまで観光地として捉えていた地域を、教育現場として捉えることで、その地域の活用促進や強化に繋がる。さらに、表4に示した実習全体の感想にもあるように、一部の学生は「授業だが良い思い出になった」、「また来たいと思った」という記述をしており、授業として訪れた地域に魅力を感じていることがわかる。教育の場としての活用促進を行うことが、若い年代に地域の魅力をPRする機会にもなり、将来的な観光への誘致に

つながる可能性がある。加えて、A大学の野外教育は教員免許状取得に必要な単位として履修する学生もいる。そのような学生にとっては、教員になった際、自身が野外教育を体感し魅力があると感じた地域を、野外教育のフィールドとして選定するきっかけにもなる可能性がある。このように、「人材育成」を背景とした「地域力の活用促進・強化」は地域の発展に寄与するものと考えられる。

最後に、「現行取組の補強や新規事業の起業」は、「人材育成」や「地域力の活用促進・強化」が達成され、これまで観光地として認識されていた地域に「教育」という付加価値が加わることで達成されると考えられる。地域住民は、大学教員とともに活動プログラムを考案することから、教育プログラムを検討する上で重要な点に触れることになる。観光では「楽しい」や「美しい」、「癒される」といった感情を引き起こすことが重要になるが、教育活動では活動を通じた「学びの場」をいかに作るかが重要なポイントとなる。表4に示した実習全体の感想にもあるように、「挑戦すること、経験する事の重要性を感じた。」、「大変な場面もあったが、達成感があった」、「ただ楽しむだけではなく、学習の場として素晴らしいものだと感じた」などの記述から、教育活動としてのプログラムを考案する際、ただ楽しい活動を行うだけではなく、挑戦することや大変と感じる活動を含めて行うことが、学生の「学び」につながるかわかる。例えば、地域住民がこれまで行ってきた「観光用プログラム」に加え、野外教育で実施したプログラムを「教育用プログラム」として事業に加えれば、「現行取組みの補強や新規事業の起業」につながる可能性があり、地域の発展に寄与するものと考えられる。

文部科学省は令和4年6月に「子供の体験活動推進宣言」を発表し、子供の体験活動の量的・質的な充実を目指すことを宣言した(文部科学省, 2022)。子供の体験活動推進に関する実務者会議によると、体験活動は「生活・文化体験活動」、「自然体験活動」、「社会体験活動」に分類され、「自然体験活動」は「登山やキャンプ、ハイキング等といった野外活動、又は星空観察や動植物観察といった自然・環境に係る学習活動等をいう」と定義されている(文部科学省, 2022)。野外での活動を伴う野外教育は「自然体験活動」のひとつとして捉えることができ、今後も重要な教育活動として注目されると考えられる。したがって、地域にとって野外活動を教育として行った経験や知識は、地域にとってのメリットになりうる。大学が中心となって行う野外教育を、今後は、地域住民とともに運営することで、「地域の特色を生かした教育方

法の実践」が可能になる。さらに、このような実践の場が継続し「教育用プログラム」が蓄積していけば、地域の発展に寄与する可能性がある。

4. 3. 本研究の限界と今後の課題

本研究で収集した学習満足度評価は、実施した活動の満足度を5段階で評価し、評価の内容を記載するものであった。評価の理由のみを記載するため、実施した活動の改善すべき点や悪かった点の把握が難しいという課題が挙げられる。学生の学習満足度評価を大学や地域に還元していくためには、評価の理由に加えて、改善点を含めて記載を求めることで、両者にとって有益な情報になると考えられる。さらに、野外教育を実施した地域に感じた魅力や評価など、地域のメリットに焦点を当てた項目を加えることで、地域に還元できる情報になるであろう。また、本研究は、ウォーターアクティビティ実習のみを調査対象とし、学習満足度評価を収集したため、限定的な意見しか収集できていない。野外実習やスキー実習においても、地域住民との連携により実施される野外教育の例を蓄積し、学習満足度評価を収集することで、野外教育を通じた大学地域連携のあり方について検討できると考えられる。

加えて、地域側のメリットについても、完全に地域の実情を反映した内容になっていない点が課題として挙げられる。野澤(2016)は、大学の地域連携活動を持続可能なものにするためには、大学と地域が互酬的な関係であることが必要だと述べている。大学側には、野外教育により学生の実践の場が得られ、学内では生み出せない教育効果を得ることができるというメリットがある。一方、野外教育の実施に伴う地域連携は、地域側の負担になりうると指摘されている(土屋, 2022)。本研究は、「学生による学習満足度評価」、「地域人材の発掘・育成」、「地域力の活用促進・強化」、「現行取組の補強や新規事業の起業」という視点から地域側のメリットについて考察を行った。しかし、講師を依頼した地域住民の感想や意見等を得られておらず、実際に、どのような点を地域側のメリットと感じているか、あるいは負担と感じているかを調査できていない。今後は、地域住民のインタビュー等を含めて調査を行うことで、大学と地域が互酬的な関係を築くために必要な情報を得ることができると考えられる。

5. 結語

本研究は、大学と地域の連携を重視した野外教育の実践例と学習満足度評価を示すことで、大学と地域の双方

にとってメリットとなる野外教育のあり方を検討することを目的とした。学習満足度評価の結果、地域住民とともに考案した活動プログラムの評価は高く、一定の教育効果が認められた。さらに、大学と地域の連携を重視した野外教育による地域へのメリットとして、地域を教育活動の場にできるという点が挙げられる。志賀高原は観光地としての魅力が溢れる地域であり、その自然環境を多くの若い世代に体感してもらうためには、教育の場として活用することが有効である可能性がある。野外教育で実践した教育プログラムが蓄積していけば、「地域の特色を生かした教育方法の実践」が可能になり、地域の発展に寄与するものと考えられる。

利益相反

本論文に関して、開示すべき利益相反関連事項はない。

参考文献

浅井泰詞・水上健一・深田喜八郎・青木謙介・樋口和洋・中村剛 (2020) 野外教育が大学生の自己効力感に及ぼす影響：マリンスポーツ実習に着目して。The Basis：武蔵野大学教養教育リサーチセンター紀要，10：71-78。
中央教育審議会 (1996, July 19) 21世紀を展望した我が国の教育の在り方について (第一次答申)。Retrieved December 11, 2023, from https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chuuou/toushin/960701.htm
中央教育審議会 (2005, January 28) 我が国の高等教育の将来像 (答申)。Retrieved December 11, 2023, from https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/05013101.htm
橋本公雄・井上弘人・藤塚千秋・石橋剛士・宮林達也・甲木秀典 (2013) 短期的野外キャンプ活動におけるコ

ミュニケーションの促進効果一質的分析一。熊本学園大学論集『総合科学』，19(2)：19-30。

池田幸應 (2015) 地域環境を活かした大学生との協働による野外教育推進策の検討。金沢星稜大学人間科学研究，8(2)：29-34。

文部科学省 (2022, December 27) 企業等と連携した子供のリアルな体験活動の推進について (子供の体験活動推進に関する実務者会議論点のまとめ)。Retrieved December 11, 2023 from https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shougai/046/attach/mext_00002.html

中澤 史・麓 正樹・谷木達男・山崎将幸 (2014) スキー実習による受講生の社会的スキル向上効果。法政大学スポーツ研究センター紀要，32：9-13。

日本野外教育学会 (2022) 野外教育を通じて子供の育ちを支える一全ての子供が豊かな自然体験を享受できる社会を目指して一。日本野外教育学会政策提言。

野澤一博 (2016) 大学の地域連携の活動領域と課題。産学連携学，13(1)：1-8。

青少年の野外教育の振興に関する調査研究協力者会議 (1996) 青少年の野外教育の充実について：報告。文部省，東京。

総務省 (n.d.) 「域学連携」地域づくり活動。Retrieved December, 11, 2023, from https://www.soumu.go.jp/main_sosiki/jichi_g_yousei/c-yousei/ikigakurenkei.html

須田康之 (2013) 教員養成と地域連携一可能性と課題。北海道教育大学旭川校地域連携フォーラム実行委員会編，地域連携と学生の学び一北海道教育大学旭川校の取り組み一，協同出版，pp.40-46。

土屋弥生 (2022) 教職志望学生の効果的な現場体験学習の在り方について：地域・学校・大学の連携の重要性。大学地域連携学研究，1：14-22。